



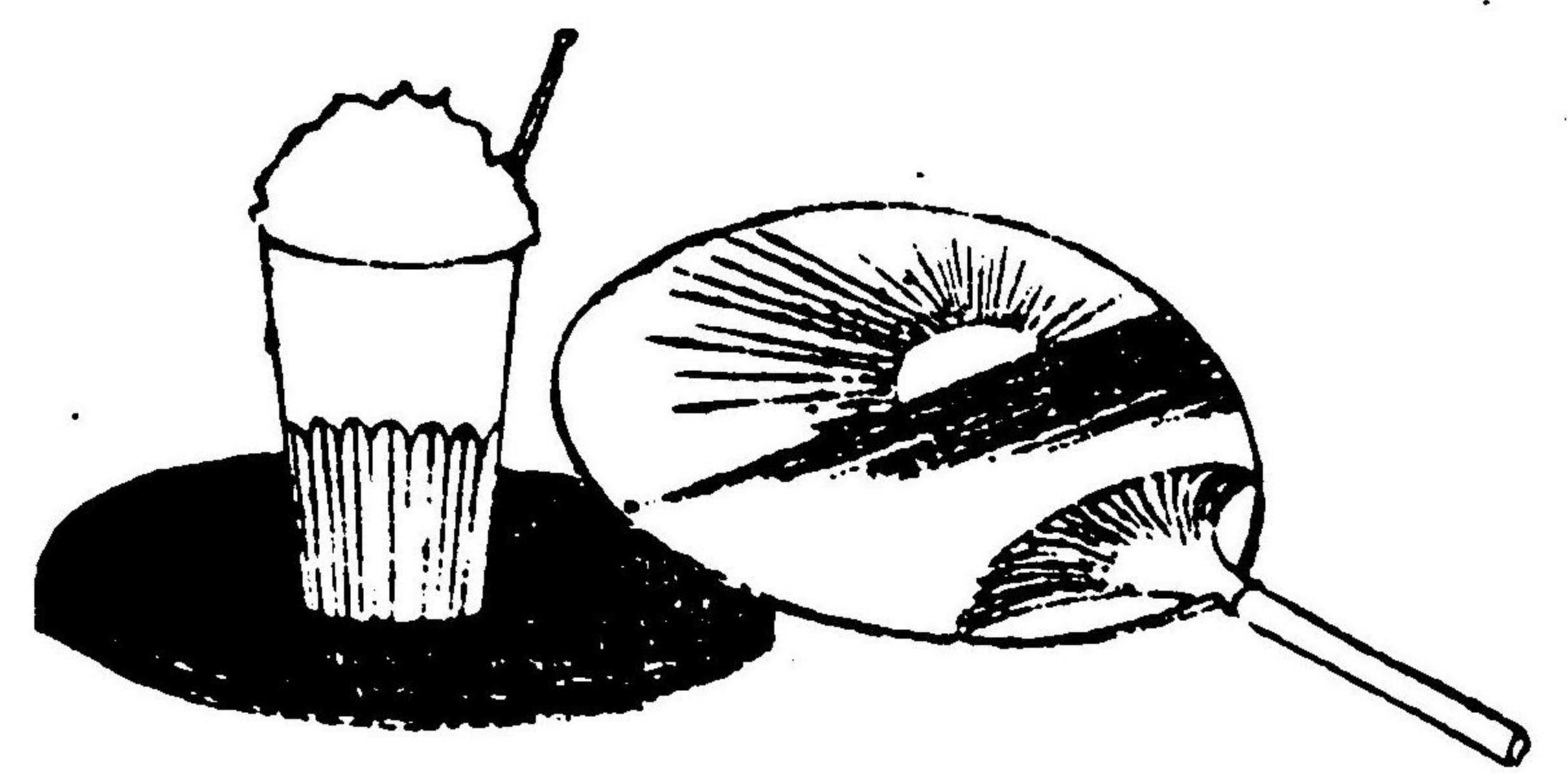
1  
77  
新橋園月高傳

花井

於梅

醉月

奇聞



花井お梅醉月奇聞緒言

外面如菩薩内心如夜刀當世姐妃は再來と其名の教坊

は響く耳が都鄙乃人口に膾炙せし花井お梅の謀殺事

件は我人共に聞んとすれど新聞紙上に載する處は多

るより閱覽乃便宜らんとて這回明二堂

主人お梅の梅の校書會社に墮落をてより遂に演明

事實と實地に就て探報なり聊か潤色して冊子に綴成

したる近來無類の奇書なりと主人の言を其儘に緒言

に換て誌すものゝ東都の逸民廣瀬河南生なり



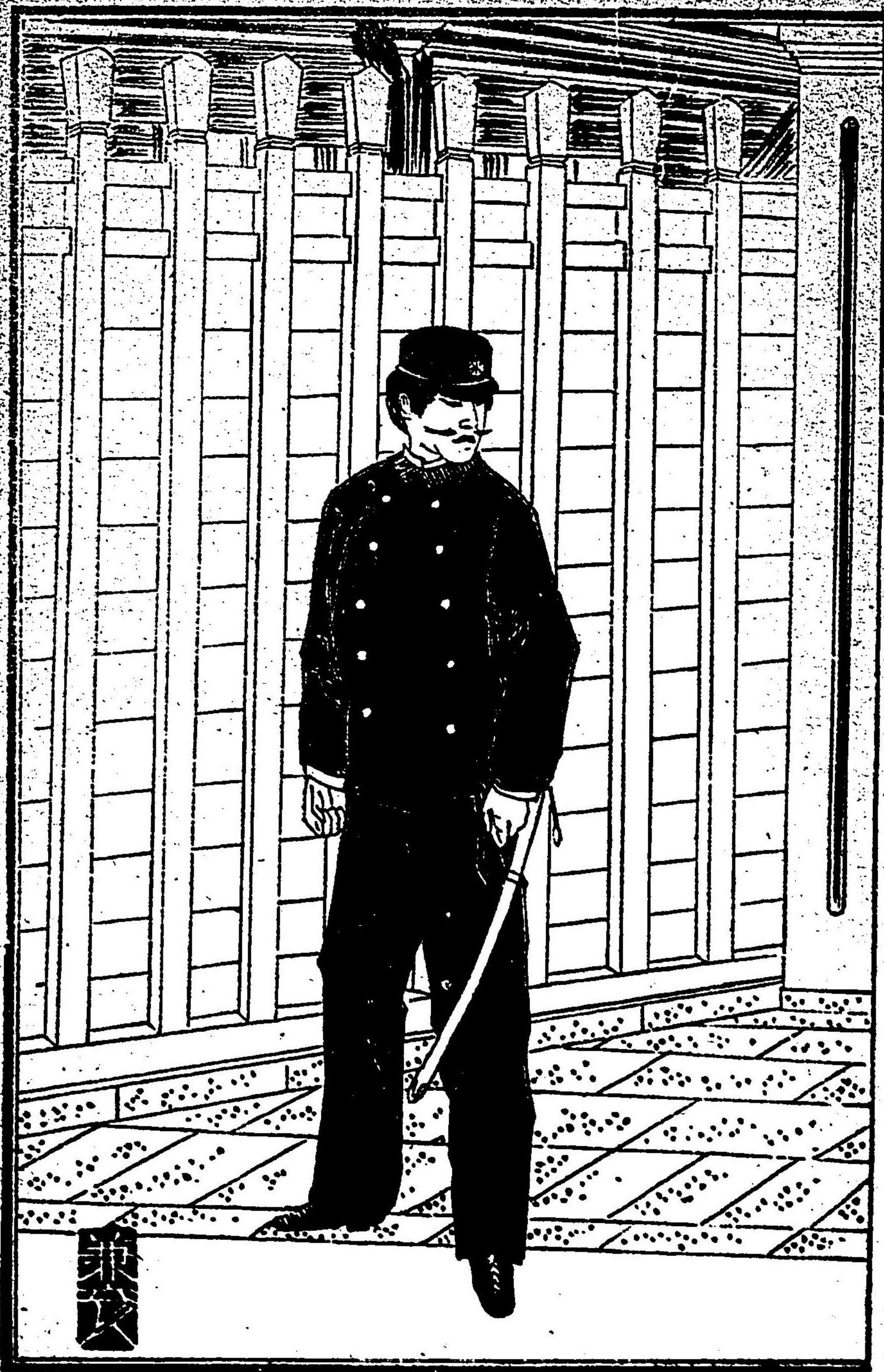
● 醉月奇聞の餘白を填む

嘗て高橋於傳ある者人殺の大罪を犯して其の  
名を都鄙に聞へたる事ありき好事は門を出さ  
れども惡事千里忽まち人乃耳口よ上る吁人の  
性は善なりといへど何か故に此の如く惡事を  
聞さ惡事を見ることと好むの甚しきや當時於  
傳か名新聞よ小説よ講談に演劇に掲載稱呼し  
て益々其の惡を世間よ披露するものに似たり  
豈疑かはしきの限ならずや頃日花井於梅なる

者また人殺しの大罪を犯して終に無期徒刑の  
法よ處せらる嗚呼梅花の馥郁たるも一陣の狂  
風よ逢ては亦た昔日の清香と残さすことよ書  
肆明二堂なる主人花井於梅か罪惡の轉末と詳  
記して一小冊子となし來つて余に序詞を需む  
余其の主人か當込の敏捷にして乃ハち彼の惡  
事を披露する者に似たるの疑かはしきに驚ろ  
凡唯默諾して此の文を識すの

丁亥初冬

三春亭主人



東京重罪裁判所



俳優故市川海蔵



俳優大岡首造



花井専之助



俳優澤村源之助



俳優角田真平



持10  
776

●花井於梅粹月奇聞

秋葉亭 霜楓編輯



第一回 魂は夢に行けむ古郷のわが扱がらの家を思ふて不如歸と啼きつゝ翅を返せど  
 元に戻さぬ雲の關鎖しも堅き閨の間てゝろの鬼にうさされし手は胸にある身のわかつき覺  
 てくやしき思ひ寝の見果ぬ夢の世はさまく支体の汗の梅雨ごろも乾すよしも無き檻獄の  
 栖ひ我にもあらで己が手に作て罪の物狂ひ魂ひ元に歸ては夢にゆめ見し如くにて其あ  
 す業の恐しく淺猿くも又哀れあま乍麼この花井お梅といへるは舊下總國佐倉の藩士向某の  
 一女にて代々財襲の家を生れ武家のむすめと城下の民に敬はれしも舊新の世の變り日に飛  
 鳥りきのふの扶持はけふの瀬や水の流れの浮沈み人に車を挽かせ一人が人の車を挽時あり  
 て榮枯盛衰所を替へるも浮世の常の習ひし歎お梅親子の零落の範圍に入世業の活路に迫  
 りし行路難その頃麻布袴色町に紅梅焼といへるを商ふ熱心師岡田常吉といふ者あり此夫婦  
 の中に子なきゆゑ乞ひてお梅を養女とせしは去る明治四年の事にして此時お梅は八歳なり  
 どぞ去程に養父岡田常吉のその後品川驛に移轉て世に一膳飯と稱へ來つる廉價飯店を開業  
 せしにはじめの中へ繁昌し常吉の妻きみ及び老母と共に養ひ兒のお梅を深く寵愛し習字踊  
 り三味線などその師をえらびて學ばすにお梅が性質藝事に疎くされ共目元すゝやかに鼻筋

持10  
776

●花井於梅粹月奇聞

秋葉亭 霜楓編輯



第一回 魂ひは夢に行けむ古郷のおが扱がらの家を思ふて不如歸と啼きつゝ翅を返せど  
 元に戻さぬ雲の關鎖しも堅き閨の闇こゝろの鬼にうあされし手は胸にある身のわかつき覺  
 てくやしき思ひ寝の見果ぬ夢の世はさまく支体の汗の梅雨ころも乾すよしも無き檻獄の  
 栖ひ我にもあらで己が手に作て罪の物狂ひ魂ひ元に歸ては夢にゆめ見し如くにて其あ  
 す業の恐しく淺積くも又哀れかまど乍麼この花井お梅といへるは書下總國佐倉の藩士向某の  
 一女にて代々財藝の家に生れ武家のむすめと城下の民に敬はれしも舊新の世の變り目に飛  
 鳥川きのふの扶持はけふの瀬や水の流れの浮沈み人に車を挽かせ一人が人の車を挽時あり  
 て榮枯盛衰所を替へるも浮世の常の習ひし歎お梅親子の零落の範圍に入世業の活路に迫  
 りし行路難その頃麻布雑色町に紅梅焼といへるを商ふ熱心舖岡田常吉といふ者あり此夫婦  
 の中に子あきゆゑ乞ひてお梅を養女とせしは去る明治四年の事にして此時お梅は八歳なり  
 どぞ去程に養父岡田常吉のその後品川驛に移轉せ世に一膳飯と稱へ來つる廉價飯店を開業  
 せしにはじめの中ハ繁昌し常吉の妻きみ及び老母と共に養ひ兒のお梅を深く寵愛し習字踊  
 り三味線あどその脚をえらびて學ばすにお梅が性質藝事に疎くされ共目元すゝやかに鼻筋

とほり色白くあまめかず生長に随ひて垣の葎花見る目を覺し頓て高貴のお側仕へさぞ別嬪  
と召さるゝならむと婀娜の姿の評判の高輪さつて隠れなく未だ肩揚のありぬ比よ業平衆  
きのまめ男の初花の咲時箱を待てり然るにお梅は養父の家業一膳めし屋のむくつけくむさ  
くろしきを深く思ひ妾の毎日店頭に出入お客の大勢か卵の花汁やけんちんをたべるを見る  
のも不潔らしひから何卒江戸向へ出して柳橋か葎町の藝妓の抱へにしておくれ聲は悪くも  
三味線は調子が合から座敷へ出たら精一はいお客を勤めて兩親に在り團扇を持たせる心一  
せん飯屋の相續ではお父さんやお母さんに所詮樂のさせられぬから疾く藝妓にしておく  
れと度々迫るに養父母も義理ある子るゆ新聞記者の筆頭に折々懸り猫と呼せる氣のあいが  
内々關た口へ牡丹餅でも有つたのか庭までい捜られねど何分本人の強ての所望止り得ず日  
本橋區元柳町廿八番地藝名●●屋こま(本名七里りき)方の抱妓に遣り最初小今と名乗せて  
へい今ばんはと半玉の披露せしはお梅が十四の年なりけり

第二回 糸竹の節に操はこむれども手折やす氣に見ゆるうたひ女どの元祖爲永春水翁か  
人情本の餘興の詠にて梅曆の年を經春告鳥の囀り絶しと見れば未だ餘波の跡を斷たず然ど  
る古今宴席の越き變らず酒には肴酌には藝妓雪見の舟のさんばしに素足を花美に白脛の  
清きを見せし吾妻下駄も維新以來クット開け藝妓氣貫の春の屋大人の筆頭に綴るも難くお

ほろに筋を立共その内房を窺へば凡そ東京十五區外府下五郡(東多摩郡を除く)千三百  
二十餘人の猫(否)校書社會に浮氣の除て客席の出来心得意の割烹師待合茶屋の大阿姐が周  
旋に雲とお言の間に應じ雨と答へねば故意を生じ來いどの口を懸ていくれず朱に交はれば  
赤襟の半玉頃より手あづけられ心も細き糸竹の節も操も捨撥にどうせ汚れた此からたど金  
で迫れた鼻下長者の口おはし自腹で俳優を茶屋に招き遊藝者流のえらみ喰月さほめの定客  
より自身散財の隠れ遊びが面白狸の野鬨間を取参の大姉株限りある貯への紙幣花を持散ら  
した揚句には米櫃の旦那に離れ得意の客は聘むてくれず遂に借金に淵にはまり物前の首か  
廻らず果の東京に居て堪らず股旅猫と踏出す便毒よこね八里は馬車でも越すが踏むにふま  
れぬ証書文面本籍の抵當物何處までも怨靈の祟りは遺れぬ附廻り四十島田の再々再勤末  
をいら髪を生るまでへい狐蠶と縮緬皺の笑顔をつくるも汝が罪汝に出る老婆猫身の成行ぞ  
悼ましき此は是むかし藝妓の果にて當世の開化猫の表面浮氣の心細り若い時は二度おい  
花の盛りに稼ご溜座敷を退いたら實を結び御新造さんや奥さんと崇められるが婦女子の榮  
譽と先刻承知の胸算用斯てお梅の柳ばしへ半玉の弘め間もあくる年は十四か十五夜の月の顔  
ばせ桂の簾座敷のやうすい古顔の藝妓そこのけ年増はた一の扱ひにばア猫の三舎を避け  
實に小今さんは達者奇妓だヨと紅の舌を巻もあつ又い及ばぬ妬み根生蔭の噂も口々にい



エ、彼娥鬼ほど生利者の半玉中に稀です。座敷へ出ると年を取つた妻達を刺闘いで万遍なく饒舌ちらして酒は底抜けカッ、飲たてサひとりで座敷を切つて廻し外の藝妓にやア口を開せないうら彼娥鬼と一座をしようとホンヤリ黙止て聽いて居るので何程に手持無沙汰だらふ今にどん赤藝妓にあるのか一座に成つたらサソ切て廻すだらふと譲るもあれば譽るもわりて離妓の頃より小今の名ハ兩國東西の茶屋料理屋に隠れなく正午から通清樓の毘大盡に召るれば午後三時より生稻のお約束晝夜をかけての座敷敷に色付く花の盛りに乗じ一本立の改名披露茶屋船宿の弘めの間をお待かねの富込連は小今改名小秀と成り消燃ぬけのした白襟風が早く見たいと前後をあらそい伊豆屋日野屋の掛持座敷裏河岸石涯の御挨拶箱丁は足に脚氣を踏出し船頭は陸を走り先を越されて跡口を堅く約し待身は憂き佛の下長きをかこつ客も多かり

第三回 新を競ひ奇を好む人情の獨り開けかゝりし我と國のみてあく歐洲文明各國の地廻り運中(否)洋行先生のお話説にも承まはりしが佛國の巴甲英國の龍嶺橋邊の伯林あたりてさへ流行物は時を追ひ奇しい事といへば中等以下は聴く耳あつ立分邊境新聞の下等探訪者の千里眼を光らし順風耳を聳て針程の細事を捧程に引延はして本社に報じ數日珍事のさい時は同職と打合せみつから首縮る体をなし或ひの投身の振を見せ知己のものに示し合

一マア、待てと留させて死なねば成らぬ云々の物語り實に我輩は或新聞社の種取でスが數日間報道の種子を得て本社に對し記者に接一面を合す道なければ突然退社せんとするも既に月給の前借あり此儘に退けば月給前借の証書を以て被告せられむは必定なり職に離れ消却の道絶え糊口の術盡たれば所詮此世に生甲斐なし離れて殺てたまへかし、南無あみ陀佛ではさいア、メンと振拂ふを強て押へて連戻し此云々を本社に報じ其日の紙上に記載させ餘白を塞ぎて同日の「フニクニウス」に發行すると是こそ實に新聞中のホヤ、新聞煙に巻かれて印刷の數を増す杯腐つても鯛どの文明國にない諭言願でも鮮魚のはしり喰て見る氣に成る人情大川端の人力宿に善悪あき挽子の口車もまんざら無根の噂にあらす夫とて全く事實とは保証の出來ぬ街談巷説語り續け聽繼し雑談はお梅の小秀が身の上にて實父養父の目他平等血で血を洗ふ悶着も養育金の償ひに方双の苦情も籠まり小秀の實父の方に戻り有繁天下の豪商が尻押とて流行猫の景氣よく又更めて柳橋へ一本立の弘めを仕直し旦那の本尊を内陣の秘佛にしてかん前行の客の數々座敷勤めのいとまには老ても遊い舞臺の枝を素顔であふて三河屋どの内幕ばなし狂ふ心の猿若町茶屋の二階に松島屋浮氣はその日の出來とゝろど劇場茶屋の氣儘遊び花美を浮名も川崎の大師詣り遠出遊山の自前遊びは藝妓の保養と放逸に春の日の永きに飽す秋の夜の短さをかこつ内得意の豪商は老の玉の緒三寸

の糸切れて十方億土の旅行の跡の不意の事ゆゑ最愛の小秀に遺す手當もせず途方に感慕の  
くり廻しはハテ何としたら宜からふなアト獨り思案の門の口格子カラリと「へい今日は  
オヤ大姐呉服屋さんがと抱妓の知らせ小秀は胸にキツクリとわたる火鉢の灰掻きならし又  
催促かど心に一物「サア此方へおわがんなさいナ

第四回 伊勢編は奢らぬ神の仕着せありトは年季丁稚が股參宮の旅支度踏出さぬ内尻が  
破れ御振箱と成し頃の狂句にして呉服屋の店頭松坂木綿の布子を著流し白雲天窓の小坊  
主と前髪と青小僧が長暖簾の内を走せオイーイ〜と呼び叫き買人を誘引文久以前此時世  
の駿河町の越後屋大馬馬町の大丸日本橋の白木屋尾張町にるびす屋布袋屋新橋の松坂屋下  
谷の伊東松坂村郷の伊豆倉廻町の岩城枋屋と金蘭純子紗綾ちりめん糸織袖太物木綿及物き  
れ地の敷を盡し店々品を競ふ中に横町新道の格子戸造り土蔵を備のうしろに構へ仕入の相  
布反物類を遠近の出入先に脊負込て糶商ふこと今もあり此商人多くは婦人を得意とし結紳  
の奥向に侍女の取次を経て細君令嬢權妻に達し買人自己その品の地合善と思き分つる便  
あり取分東京花柳の地は何處を問はず藝娼妓の衣服えらみ取寄せて見る瀧河の花美と質素  
どのハやり物買れる賣れぬも藝妓のたしあみ自前は更なり抱妓の身も四季をり〜の移り  
替出と着替との二タ重ねは三味線どもに支休の付物裸身で座敷がある者歎と如何融通を仕

盡して揚代頭頭の價直だけは着飾らねば成らぬ營業定客筋へも如才なく是まで無心も度  
重なと又今度とも言出しにくく舊弊ながら附渡りの五節句會計を取得にして表地裏地帯の  
皮襦袢の巾地とそろ〜借込み總締高の勘定へ三分の一を入金しては又を〜の引代物  
に金高はます〜登りなしても三百代言屋の先生に委任したは止を得ぬ商法づく花美と質  
を見えを飾る藝妓にも顔の美醜座敷の調子賣ねと來たら高利の山借金の淵前後に迫れば耻  
も外聞も厭ふておられず勘解の袋に代に出し「ノホンホ」で澄して居た敷始審裁判所の目  
身出には少しく驚いたが走る者の道を知らず香潮々々と押出しての有聲に顔も染井のつ  
〜と眞赤に耻をかき散らすとまり木のはいらの瓜跡つまり消却の目的なく三味線一錠空筆  
筈にうら萬籠世帯道具のカラクタ一切身代限まで高飛の身支度に瀧車迅速の上州行き伊香  
佐磯邊の温泉場に股旋猫の道中往來百目に足らぬ小猫の頃よりわく銀身に付かず藝は身を  
助ける程の薄命四十島田も五十の坂登りかけては田舎稼ぎの野ら歩きも進まぬ足元輕ばぬ  
先の杖を貯ふ藝妓へまんが稀ある中に彼歌川屋小秀大姐の腕に覺ゆのかくし藝常に入入の  
糶吳服を程と調子で旨くあやあー自身の衣服幫間筋惡意の藝人誰渠への糶昨羽織出入の職  
工抱への箱丁誰彼への二季の仕着せ茶屋の女中へ何かの義理此所へ一反彼所へ二反とやた  
ら無上に借入たが貸す呉服屋の壯い者も根が商人無勘定な男では有まいが是には内々情も

あり深い譯もあてしと見え辨々タラリと待甲斐なく何時勘定を年暮のつまり小秀ばかりに三百圓ほど買かけ代金の延滞りもまんざら手強く催促の出来難い内情ゆゑ攻て貸高を請書に結び主人へ言譯の種にせんとてその睡きを掛合はんと今此家に入來りしあり

第五回 いろ／＼に思ひ定めてかわるらん定め難きは心なりけり丁稚の頃より堅固者ど雇ひ主の目録に適ひ世嗣といふは一粒種女の見でも他家にも稼されずひとり娘の躰えらみも未結婚條例が下々へは發布にあらざ十二の年から心懸は大概に見定め雇ひ人の彦七算筆も可成に出来借入の傍訓新聞から讀わけて大新聞の社説欄も樹略は解るやうす今年二十二の曉まで店をわけたやうすも無く耀に得意を廻らしても上手に商ひの嵩をこなす先九分九もん引負などの不埒の無いと看認た手代せめて娘が十六の春待て氣の知れぬ赤の他人を世少の持参金で聲に取るより彼者を養子とし娘とあはせて身代を渡すのが上分別若い夫婦の後見は已がするど豫じめ心に決し内々智の丁簡ゆゑ買先得意の心おきあく彦七に打合せ丁稚を附て折節に得意先を糶賣の香負荷物チト會計の長引が藝妓屋商ひは利益も多く夫から夫と引代物浮雲い橋も渡つて見ねば大身代にはあらぬと主の腹の締括りに淺草日本橋の兩區をかけ葎町柳橋の藝妓屋を此處彼處と糶廻る吳服屋の若手代小秀が方へも繁く出入いつも奇麗に耳を揃へまどめた紙幣の拂ひぶと好いお得意と貸込むうち此壯い者は大

酒あらぬと小酒を嗜むその飲口に附込みて今日入來しを見かけた山オヤ彦七さんお出ささいマア／＼スット此方へお出和主の處へも勘定か溜つてゐるから賣て半金でもあげたいと思ふけれど今日は如何したんだか座敷もさつぱり暇に成つたしお約束のお客先も掛違つたので不沙汰に成つてすまないかどうせあげるお金だから都合が出来たら何とを措ても勘定をする積りでスガ而て幾干ばかりに成つてゐるチー(彦)へイ毎度御用を仰付られ是まで物日には奇麗にお拂ひ下さいますから御催促を致すのもお氣の毒様でスガ段々の引廻りが當春から今月までザット三百圓程になり升ので主人のチ升にの荷主の拂ひに差支へ後荷の都合にも成升から必定お物入も多し中で有ませうが此月の句切目には是非半金をと言はせも果す「半金所じやア有ません惣勘定をする積りでスガ免角お金の約束は間違ひ安いもんでスチーと烟草一ぶく吸つけて吸口を袖に拭ひてさし出す折しも當家の下女が盥洗と猪口うち合す音カチリン(彦)大姐是から赤阪の方へ懸廻りに出向升から今日はお預けに致します「あんですチーお酒はあげても勘定を拂いあいとは云はあいヨ今升田屋の大姐から貸つたお肴が有升からお酒が嫌からモウドンですから午饌をサ(彦)イエ／＼如何致してそんなに落付いては居られません「マア一盃おわがりといつたチーと抱妓の酌でクット乾し指す盃に強付てなみ／＼稽れ固辞も成らず下地は好きと御意はよしと腹の虫の鳴音を押へ

一口飲んで下にさし置(彦)實に今日は物日の懸先モウ是切でお預(ト)オア左様ですか無理に  
 献(ひ)しませんか午饌前にモウ一盃と疊の上に置く猪口へ繼足す酒のみみくど溢れて浸す  
 膝退け(彦)十二時前から酔ますと得意廻りが出来ません「ナニマア宜(い)じやア有(あ)ません歟  
 第七回 堤の柳冬枯(つ)て川邊淋(し)さ真夜中(ま)でろ脊中(せ)中に負(お)し大風呂敷(お)も目方(め)方は軽(か)き足元(あ)の闇  
 路(みち)をたどる徐々(そ)々歩き今年(こ)の關(せき)に近(ち)かづと我(わ)から銷(せう)す心の扉(か)閉(と)ながらに立(た)とまりア、今夜  
 も大分(たい)深更(ふか)だのへ毎(ま)ばん遅(お)く歸(か)りても是(これ)まで間違(まち)ひも無(な)かつたので旦那(だんな)はよもやと氣(き)をゆる  
 しツイ一度懸先(かけ)の融通(わづら)を糺(ただ)された事(こと)の無いが彼(かの)柳橋(やなぎはし)の一件(いっけん)には當春(このはる)以來(いらい)貸込(か)した品物(しなもの)の代金  
 が積(つ)りくして三百餘圓(さんひゃくごじゅう)圓(えん)けふ迄(まで)に半金(はんきん)を是非(せひ)とも入れる約束(やくそく)ゆる出向(で)いて行(い)と按(あん)の外(ほか)百五十  
 圓(えん)の三十日(みそひ)までに入金(にんきん)するから殘金(ざんきん)は証書(しやうしょ)に結(む)して月々(つきづき)に五圓(ご)宛(えん)のなし崩(くづ)して濟(す)しておく  
 れ其(その)かはとに是(これ)からは成(な)りたけ現金(げんきん)で買(か)ふとの言分(いひぶん)彼(かの)藝妓(げいぎ)衆(しゆう)には自前(こゝろ)以來(いらい)千圓(せん)餘(ご)の品物(しなもの)も  
 買込(か)むだ上得意(じやうご)ゆる否(いな)ともいはれず半金(はんきん)の証書(しやうしょ)を取りその半金(はんきん)の半分(はんぶん)も請取(うけと)つて歸(か)らふと  
 した了簡(りょうかん)赤(あか)のを馳走(ちそう)の酒(さけ)を強付(じやうづ)られツイ一猪口(いっしゆく)が一(ひと)陶器(たうき)と盛(も)られて腹(はら)の調子(てうし)が狂(くる)ひ平常  
 慎(つつし)むて居(ゐ)た甲斐(かひ)もあく素(もと)より好酒(こうしゆ)の酔性根(よせいこん)を亂(みだ)した「へいレケ」に正午(せいご)前から飲(の)つ、け酔  
 ふて倒(た)れた夢(ゆめ)うつ、跡(あと)の始末(しまつ)のしら川夜舟(かわよふね)夕方(ゆふがた)方覺(かたさめ)て懷中(くわいちゆう)を探(たづ)つて見(み)れば此(こ)は如何(いかに)に先刻(さうご)取  
 つた証書(しやうしょ)があく落(お)し、せぬかと居廻(ゐまわ)りをたづねるのを見て下婢(ひめい)の云(い)には其(その)証書(しやうしょ)とやら、先  
 刻(さうご)方家(かたがた)の大姐(おにさま)にお遺(お)ささいましたので大姐(おにさま)にお禮(れい)をいつて直(ただ)に裂(き)いておしまいですと聞(き)い  
 て胸(むね)を少しし大姐(おにさま)は何方(なんぽう)へとたづねると今(いま)おあじみのお客(きやく)くら口(くち)がかつて出(で)かけました  
 がたしか二三日(ふたみっか)泊(とど)りがけお遠出(とほで)とやら急(いそ)にお歸(か)りの有(あ)りまいといひられてカツカリ途方(とち)にく  
 れ是非(せひ)とも今夜(こんや)は半金位(はんきんぐらゐ)取(と)つて歸(か)らねば主人(しゆじん)の前(まへ)へ分疏(ぶんしゆ)の成(な)らぬ場合(ばい)素(もと)より彼(かの)處(ところ)の親達(おやぢ)に  
 引合(ひきあ)つて貸(か)した品物(しなもの)でもいゆるナンホ實(じつ)の親子(おやこ)の中でも留守居(くわしゐ)に催促(せいそく)するといふ筋違(すぢぢが)ひとすて  
 く戻(かへ)つて來(こ)れた者の如何(いかに)しても此(こ)深更(ふか)に又(また)けふも一錢(いちせん)も勘定(かんじやう)してゆくれませんと何(なに)の面  
 さげて主人(しゆじん)の前(まへ)へ能面(のうめん)と出(で)られやう十年(じゅうねん)足(た)らず辛抱(しんぱう)の甲斐(かひ)も無(な)く百日(ひゃくにち)の説教(せつかう)何(なに)とやら  
 殊(こと)に主人(しゆじん)の内意(ないい)には辛抱(しんぱう)を見届(みと)げたらゆくは娘(むすめ)の聲(こゑ)にするといふ厚(あつ)いおほし召(めい)を忘れ  
 はせぬが好(す)な酒(さけ)たましく飲(の)んで前後(ぜんご)を忘れ賣懸(うりかけ)代金(だいきん)を結(む)び込(こ)めた証書(しやうしょ)を濫(あ)らに遺(お)たとは夢(ゆめ)さら  
 知らぬ酒(さけ)の上(うへ)醒(さ)めての覺(おぼ)れのない始末(しまつ)と歩(あ)みながらに我(わ)れと吾心(わがこゝろ)に問(と)ひつ、口(くち)の内吐(うち)やきな  
 ら行先(ゆきさき)に枝(えだ)さし出し枯柳風(かれやうかぜ)にふる葉(は)のばらくと夜露(よつゆ)をふくみて散落(ちり)れば「エ、冷(つ)たい氣  
 味(か)の悪い(わるい)と後退(あとど)りア、此(こ)やなぎの先月(すきげ)下旬(しんげん)の何新聞(なにしんぶん)だかに戴(の)せて有(あ)つた呉服屋(こふくや)の若い者(わかいもの)が  
 吉原(よしはら)の娼妓(しやうぎ)に入揚(いりあげ)大分(たい)主家(しゆけ)に引負(ひきお)が出來(こ)れたので消却(しょうじやく)の目的(めいてき)があく家出(いであ)はしたが遠國(えんこく)へ遺(お)亡  
 するには旅費(りよひ)が無(な)く一層(いっしやう)死(し)むてと此(こ)柳(やなぎ)へ首(くび)を釣(つ)つて死(し)むた朝檢視(あさけんし)のお出(で)に成(な)らぬ前通(まへと)りか  
 へつて見(み)かけたは物揚場(ものあげば)の東(あづま)に沿(そ)つたソレ、此(こ)大木(おほき)の古柳(ふるやなぎ)彼(かの)處(ところ)の枝(えだ)に帶引(おびひ)かけフマリと下

ツた其人は我等とおなじ呉服屋の雇ひ人と知ったのの翌日の傍新聞けふは他の身型の我身活てせつさい苦難をするより一層死むだが増てあらふと我にもあらでうか〜と柳の下に立寄たり

第八回 亡人の影さす水や枯尾花首釣て覆死ね〜柳陰氣を誘ふ死に神も已がはかなき心に生じ目に見ゆる物あぢきなく世にあり甲斐も南無陀彌陀佛本来無東西方に淨土のわりと一途に頼むは學びの道わかぬ人の慣ひぞ鈍ま〜き風が持て来る鐘の音の上野淺草揃混て一時に迫る無分別吾と我が身を羅吳服(彦)十一年の辛抱も酒に溺れて水の泡投身せう歎首縊らふ歎入水するから美倉橋や昌平橋の淺瀬ての所詮死に切れぬ底浸り幸ひさし出たやあざの枝こ〜ぞ此身の死に所さうぢや〜と脊負し包解き下して其處に投出し帯引ほどき枝に投掛け反物包を足代とし既に斯よと頰ごと伸る此時速く彼時遅く淺草橋の方よとも柳堤を鷲地宙を飛ばする手車に乗たる主の扮且は夜寒にめげぬ臘虎の帽子「オーバコート」に西洋服のあかはを覆ふ開化風それと見るより車上に突立「輪八待てと車を停めひらり飛下り今既に柳の枝に帯うちかけ首縊らんと包をふまへ願さし出す彦七の傍へに進みて突退くれば思ひ設けぬ彦七の包の上より踏〜と誰とは知らずおれし人の姿を透し見て立あがりッ、周章ふためき再び首を釣らんとする其手を拂ひて帯引取りあらがふ男を地に引据ゑ「コレ

輪八まで〜と提灯をもつと側へ持て来いと車夫を近付け彦七の姿身形を燈りに照ら〜〇何所の人か知らぬけれど危い所へ乗かけた車も他性の縁どやら必定理由もあるだらふが見れば身に添ふ風呂敷包商人風に看受たが君はマア未だ壯い身で何の仔細で死を決めたの歎生死の境に來合して留めたからの到底如何の情が有らふとも傍看して過る譯には参らむから自死する杯といふ不了箇の斷然思ひ止まらたまへ行合したか宿縁じや理由を語れば君が活路を求めさつしやる協議にも乗つて進ぜる如何ダ〜と問懸られ決死の機會に外れてこの此世の風も暮のしく地上に伏せし身体を動かし稍く少し面部をもたげ怖々ながらの震へ聲(彦)何某様かは存じませぬが夜中の御通行を妨けましてお車を停ました儀の甚だ恐れ入りましたが當今の御時世にこの不開化とも野蠻ともやし上やうもござませぬが無智文妄の私しが身に取まして雇ひ主へ對し分譯のない次第がらて自滅致す決心でござり并此上のお慈悲には何卒此場をお留し下さいませし如何考へせしめても所詮生てはあられません「是サ君夫のいかぬアそんなら自由に死ぬが宜いと犬猫ならば知らぬこと所謂三千七百万の同胞中寶丹では無いが起死回生は人間の義務じやアあい歎彼是すると中明に近い兎も角も我輩の宅まで來たまへ

第九回 (彦)御深切の有難うござりますすが一端お救ひ下さりまして是にこの深い仔細も

あり他人様へ打あけてお咄も出来ませぬ心中をお察し下され此まゝ死なして下さり升が生ずるに勝るおあさけてござり升「ハテ馬鹿な事をいふ男々君は死ぬのが勝手て有らうが生死未決の場合に來合し君が己を得ぬ事情を察して看殺しにすると云譯には參らぬ注押上でも徳義上でも是非助けんければならぬ義務つせらぬ事を論じてゐるうち忍び廻りの探偵か巡行の查公でも來合すと所謂くらやみの恥をわかるみとやら夜の明ぬ内サツサと來たまへコソ輪八ちと深更過たが泉橋邊りへ行つたら夜わかし車があるで有らう足下は先へ車を曳いてそこいらで一挺雇つてくれ(輪)ハイ、左様致しませう先生の徒歩で「ア、我輩の此人と連立て後から其所まで歩くとしやうサア歩かッしやいこの包の何だか知らぬが背負たまへト促し立られ彦七は心あらずもしは〜と他の眞情に憐るも成らず包背負ひて立起れど助けられたる其人は身装にしるき開化風も何所の誰とも知る由なく兎角に歩みはかどらぬを「是君は足でも痛めたか大分運が遅いじやないか(彦)へい其處の柳の根で生瓜を刺しました「ハ、アそりやア痛からうが死ぬに勝る我輩の宅は此淡路町じや近いから我慢さつしやれ(彦)有難うござりますと歩みながらの問ひ答へ〇失禮ながら且那様は淡路町何丁目で……一丁目一番地サ(彦)へ、左様なら御同番地に法律家の先生で大川陸造様と仰られ升お方がお出でござりましたやう「ア、居るヨ君はその大川の知己でも有歟(彦)イ、エ

久しい前主人が負債總告の一件で同業より被告されましたをり代官願ひにわがりましたが其節の先生が櫻香とやらいふ人の古殺事件の辨護に探まれ御上坂のお留守中と御門人から伺ひまして空しく歸宅致しましたが其御雷名は配達の新報紙を讀升度職た事件の折節に見當りました彼先生かと思ひ合し夫て覺えて居り升「ハア……イヤ實はその大河陸造の(彦)へ「我輩のことである(彦)へ……へいーと手持ちく後邊に退れば最前の車夫輪八は一挺の車を雇ひて立歸り(輪)且那様車を雇つて參りました「オー左様かサア君疾く乗たまへ輪八急げとその身も飛乗り二輛前後に轢らす時一も一番鶏が「オケッコー

第十回 宴席に待し色を競べ遊客に接し媚を呈げて世のたゞまひとする藝妓の身は縁日露店の榎木に似たり培養百草百花の中に咲出る中に多く人目に觸る者はその花の異あるこそ一時眺めに見榮あれ酒を勧めて客を浮か一座興を添て宴席を賑しくする唄ひ女の若手の中の腕利と茶屋船宿の評判者並の街のニ々本柳風に吹かれて何處へも靡くの詠と歌川屋小秀は花美を賣物に飾る錦の内裏は働さ者だけ放蕩も強い氣象の活潑より演劇見物は自費で押出―物見遊山は自田の權俳優の親類交際何新聞かへかきつばた入ッ橋の三河屋もチトふけ過て淋しいから若手の兄より舍弟とんと茶屋の二階にまつ島屋名懸下送りの者と大取巻への行渉り夫から夫への浮かれ歩きに客筋には不首尾とあり呉服屋小間物屋も物日か

ら物日へかけて延滞の下手廻りを苦にもせず頭痛に病ず待てば海路の日和とやら頼て愛知の「セントルメン」が浮出京になるみ絞りと土産に添ふヘラ〜が降って来る時節も有からお父さんお案じておいてヨ借金を取って食ふとは言ないからと落つき渡して平氣を顔色その頃脚売町の投機師にて諸事流行に後れぬ商個笹原といふ盛衰家が續いて手合の好い處から後町を通り抜け柳橋の活潑遊びに容貌と腕と調子との三柏子よく揃ふた小秀さん如何でケスと銀擬ひのメッキ幣間「眞鍮」といふ面白狸に狐狗狸様のお伺ひを立られると夫こそ探して望む所ると忽地にエレキが通じ振る鉄火のオー熱々に料理屋遊びの花美を棄て情夫擬ひの藝者屋這入金づくでない實情と折節の泊り込に心の寛き締りも緩み我物頼に出遣入内或日小秀が家に向き「何處へかモウ出かけたのかト抱妓と聞けば玉玉が「チャ旦那入らッーやい大姐のお土藏でス」何を〜てゐるのだと十藏の網屏をカラ〜開て内に入れば主個の小秀「お出なさいトいふた儘積重ねたる輕箱と鳥の子餅を壹個ツ、一所に並べやうす有氣を笹原見るよ」オイ是は何にするのタ(秀)ハイ妾は明日廢業をする支度です(笹)ナニ引込むと夫の誰に退かせられるのタ(秀)お客で退のじやア有ませんお前さんには木だお話をしたとは有ませんが妾も實はだん〜に借財が嵩むので晝夜に二本や三本の揚代を賣つた位ゐる様ぢやアなか〜追付ませんから一端奇麗に此土地を退いたうへ家を譲つ

て借財の方を付る積りですから引込み祝ひの眞似事にお附の時から世話に成つた料理茶屋遊船宿へわざと配り物をするのでス(笹)當も無くツて座敷を引とは夫はあんまり短氣じやアねへかノ(秀)短氣でも損氣でも追々借金の期月が切れりやア債主から報告てい身代限りでも出〜た日にやア今まで賣込むだ妾の面が汚れ升から後如何あらふと此處で一先座敷を退き家を買つて借金の方を付てしまふ積りてスト判然いふに笹原は思ひ懸ねば其所へ坐ししばらく詞も無かりける

第十一回 座敷勤めの餘暇には時々變る猫の眼の寄ると隣ると同業の噂「小秀さんの退きチー」なアに退ものかチ夕邊一所サ「オヤマ夫でも彼所の抱への妓が話したのには家の姉さんも別に退せて貰ふお客も無いやうすですが急に鳥の子餅だの輕節だのを眺らへて退く支度をしてゐると言たヨ」そとやアチ彼人の十八番浮都合の寸法てス此でのいさしたるが秀チヤンも腕の能だけ放蕩が強過るから内所が強くて悪いのであんな狂言を書て彌次町の例規を恐かしたのだとサ「オヤそりやアママ如何いふ趣向てス」おにサ夫は彼所の家のおへかおんは妾のおツかささんが世話をして雇ひに遣つた下婢だから極内のはお〜をしたが實に秀チヤンはゑらひ腕だヨ「ママ如何いふ譯だかお話〜ヨ」話せといつたつて後でその事が世間へても知れた日にやア彼下婢が饒舌たトはつきやア思はれぬからおへかおんが不首尾

にあるは子「妾は聞けばき、放し其場切に忘れてしまふのだからあいかしと云たらサ聞か  
 けてきかないと辻占が悪い子「是はマア飛た事を饒舌かけたが此節給入新聞の指き物や  
 贈答詞と来て云かけた後の、、、、、だヨ「馬琴風の小説じやアあいか開休題として小秀  
 さんの話しのサア「決てみんなに話ーちやア他の迷惑になる事だから此場切だが秀チャン  
 が廢業の支度をいたのハ笹原さんへの思はせ振だヨ「オヤ〜」笹原さんも立派な米  
 商で有ちがら是まで精人ぶツテ秀チャンと出ず入らずの中に成ッておたがあか〜彼子  
 が笹原さん位りに瞞着されて始終夫成けににして置人じやあいか〜いらが淺黄の頭巾  
 を脱ぐ所ろだど程を考へて自前で座敷を退く支度に鳥の子餅や鯉節を仕入れて見せたのは  
 其處が彼人の十八番サ「オヤ左様か子ーその支度にも大層ハサツが入ッたらふ「あアニ鳥  
 の子餅を百軒前や二百軒前廢たといつて知れた者サそして鯉節は不用になりやア割引きて  
 本へ歸すばかりだから大した損はいかあいヨ「夫も左様ですが笹原さんの如何したのです  
 エ「彼ち客も秀チャンに退かれちやアモウ己は關係のあいと足と引く譯にも行かず到底此  
 柳橋の土地を離れて何處ぞへ家ても買つて親子から下婢ぐるめの大厄介だシ左様なりやア  
 本宅のお室内さんの前や世間体も悪いから借金有といつて座敷を退にも及ばあいその借  
 金は幾千だか己が都合して拂ッてやるから當も無くつて座敷を退のは止た方が宜からんと  
 言出したのを確平押へて澤山お金を出さしたからあか〜藝妓と止る處じやあいさうサー  
 へー…マアー感心な腕です子ー妾のやうさホンヤリじやア何年迄藝妓をして居ても浮かむ  
 瀬は有ません「御同前でス何てハ藝者が藝一方で玉を賣る律義を氣じやア東製洋服で鹿鳴  
 館の舞踏會への生涯出られ無いから我身て我身の働きの無さを思ふと小笠原島へても行き  
 たくあるハ一夫は左様と三業會社の一件は大姫お前如何おしタ「彼一件も實に困る子ー妾  
 もかめ吉姉さんとは下谷に出てゐる時分から懸意くしてゐるので是非とも今度分離した會  
 社方へお加入と頼められたが敵は大軍味方は小勢少しは厭制もあるてせうが聘れる家の多  
 い方へ附のが今の流行でせう「秀チャンハ變つた氣象の人ですから會社方たの分離方たの  
 ど浮いた營業をしてゐながら野暮に四角張のは否だシ又兩方に義理があるからいよ〜  
 ぞか大きくなれば面倒臭いから菱田か新橋へ巢替をすると云てゐるヨ「妾は筒井さん（旦  
 那筋歎）に相談して風をみの好い方へ座のサ「それ〜所詮柳猫の事ですから  
 第十二回 小田原の庄司民が開廊の餘波今も吉原相談とて纏まらぬ事に驚しが爾も纏廓の  
 み成らず花柳の里の人情とて色氣の表面内情の愁から發る黨派の分離ニタ本やなき風のま  
 に〜彼方此方に立別れ三業組の待合料理屋遊船宿の直口は一切謝絶し別に〜者ハ會所を  
 設け揚代總頭の會計が滞はらぬ策を施し藝者の自由を擴張させ三業組の厭制を撲滅させる

にあるは子「妾は聞けばき、放し其場切に忘れてしまふのだからあいかしと云たらサ聞か  
 けてきかないと辻占が悪い子「是はマア飛た事を饒舌かけたが此節給入新聞の指き物や  
 贈答詞と来て云かけた後の、、、、、だヨ「馬琴風の小説じやアあいか開休題として小秀  
 さんの話しのサア「決てみんなに話ーちやア他の迷惑になる事だから此場切だが秀チャン  
 が廢業の支度をいたのハ笹原さんへの思はせ振だヨ「オヤ〜」笹原さんも立派な米  
 商で有ちがら是まで精人ぶツテ秀チャンと出ず入らずの中に成ッておたがあか〜彼子  
 が笹原さん位りに瞞着されて始終夫成けににして置人じやあいか〜いらが淺黄の頭巾  
 を脱ぐ所ろだど程を考へて自前で座敷を退く支度に鳥の子餅や鯉節を仕入れて見せたのは  
 其處が彼人の十八番サ「オヤ左様か子ーその支度にも大層ハサツが入ッたらふ「あアニ鳥  
 の子餅を百軒前や二百軒前廢たといつて知れた者サそして鯉節は不用になりやア割引きて  
 本へ歸すばかりだから大した損はいかあいヨ「夫も左様ですが笹原さんの如何したのです  
 エ「彼ち客も秀チャンに退かれちやアモウ己は關係のあいと足と引く譯にも行かず到底此  
 柳橋の土地を離れて何處ぞへ家ても買つて親子から下婢ぐるめの大厄介だシ左様なりやア  
 本宅のお室内さんの前や世間体も悪いから借金有といつて座敷を退にも及ばあいその借  
 金は幾千だか己が都合して拂ッてやるから當も無くつて座敷を退のは止た方が宜からんと  
 言出したのを確平押へて澤山お金を出さしたからあか〜藝妓と止る處じやあいさうサー  
 へー…マアー感心な腕です子ー妾のやうさホンヤリじやア何年迄藝妓をして居ても浮かむ  
 瀬は有ません「御同前でス何てハ藝者が藝一方で玉を賣る律義を氣じやア東製洋服で鹿鳴  
 館の舞踏會への生涯出られ無いから我身て我身の働きの無さを思ふと小笠原島へても行き  
 たくあるハ一夫は左様と三業會社の一件は大姫お前如何おしタ「彼一件も實に困る子ー妾  
 もかめ吉姉さんとは下谷に出てゐる時分から懸意くしてゐるので是非とも今度分離した會  
 社方へお加入と頼められたが敵は大軍味方は小勢少しは厭制もあるてせうが聘れる家の多  
 い方へ附のが今の流行でせう「秀チャンハ變つた氣象の人ですから會社方たの分離方たの  
 ど浮いた營業をしてゐながら野暮に四角張のは否だシ又兩方に義理があるからいよ〜  
 ぞか大きくなれば面倒臭いから菱田か新橋へ巢替をすると云てゐるヨ「妾は筒井さん（旦  
 那筋歎）に相談して風をみの好い方へ座のサ「それ〜所詮柳猫の事ですから  
 第十二回 小田原の庄司民が開廊の餘波今も吉原相談とて纏まらぬ事に驚しが爾も纏廓の  
 み成らず花柳の里の人情とて色氣の表面内情の愁から發る黨派の分離ニタ本やなき風のま  
 に〜彼方此方に立別れ三業組の待合料理屋遊船宿の直口は一切謝絶し別に〜者ハ會所を  
 設け揚代總頭の會計が滞はらぬ策を施し藝者の自由を擴張させ三業組の厭制を撲滅させる



は斯くて計策を纏頭包の内に廻らし賣れる事を遠出の外に布く大元粹の寸法は他の精算  
 極て相撲を取り濡手で粟の一粒万倍是から待合遊船宿會席料理屋の充がひ扶持と延滞次第  
 の得意ふりを此方から打拂ふ獨立藝者會所へ附けば規則か立ちずる屋へ勝ばれて口ハ勤め  
 をさせられる氣遣ひの有ませんヨと龜の甲より年の功古大姐に勧められ會所の規則に隨ふ  
 のかその筋の御内家に奇る譯て兎も角も場代り毎はらぬが眞の得意と譯り分らず加入して  
 すまして居る  
 とおのく老  
 館の三業組は  
 反對の會所附  
 藝者には一切  
 口を懸るなど  
 會席の威權を  
 張りしばし三  
 味線の音も遠  
 退きて土地の



景氣を損ふの  
 みか客の失望  
 藝者の失敗一  
 端會所方に  
 附いた者の三  
 業組の座敷に  
 は各々あじみ  
 の花主も多く  
 いつまで會所  
 にモタレてお



てもウタツの上る棟は無いと狐鼠く裏切の返す忠告の何だかぞんじませんが會所の人  
 此張面の名宛へ看認を捺印といふ指揮に委せ捺ましたが難女の時から御愛顧に成ましたか  
 宅へ對一濟せせんが全く欺されて加入したと歎會所の規則が最初とは違ふから印形の取消  
 にして頂戴など、風の變つた柳猫味方と見れば敵となり忍ら變る猫の眼時計繰め悶着の同  
 業分裂を何處へ附いても知つた同志一層地を換ひらきを乗って柳町の大さんばしから新橋

の金春邊へ巢替して又ひと花と小秀が思案その頃京橋區に籍を移し日吉町の新宅よき浮かむだ趣向の歌川屋秀吉と名もわら玉の年の初めの再勤披露ひろめ間もなき全盛に柳ばしから附渡る上等客の賄ひにて座敷口の有無をいはず一日勤めて二日あまけ三日にわけぬ目前遊び物見遊山劇場見物客と一所は保養にならぬと獨立の大散財にて親世水との浮名が流れ隠すとすれど時々新聞紙上にホンヤリ顯れ臘月夜も憚りの人目の關を夜毎に越ぬ母衣掛車の轆の響き自然と客の目にも入るて舞臺に降ると最負の忠告今賣出しの若山が關係多き名題猫と土地狂ふは人氣の障り水木辰之助の昔の知らず當今開化俳優が澤事杯の不体裁の改良せねばならぬ時節新富やくしやの名義が廢ると何處の歎人の強異見に或時の出會のをり是までの夢の幕は親世水も流してとの絶斷を半途聞がす小秀の忽地眉を逆立て然胸ぐら引握み其まゝ其處に押拮たり

第十三回 横濱よりの登り氣車ハ乘客の承知通り發車の氣笛一瞬間に神奈川くとの懸聲止みてエーカラくくと鶴見川崎の出入中列車の中等第何號の室内の折節下る客のみ残るは二十二三とおぼしき印紙附の本場藝者色白く眼中すゝやかに丹霞の朱唇遠山の習身材は高からぬをも決して珍竹林の類あらざぬは瓢の種を並べたやう願はくば鞍羅と成つて細腰に付かんと吾人どもに希望する所のすこぶる別嬪比しり明治十九年の冬の初旬裝飾は藍の

小辨慶のお召縮緬下着は加茂川友染の薄鼠地へ親世水にむら千鳥の大形を浴せかけ珊瑚五分球の根掛かんざしハ金足の八分球白魚をならべた様を樂指へゴールと純金の指環を御町寧に右左へはめまして加之あらす小形の金側時計是もゴールの小豆鎖りを襟先に光らし芳町の香取屋へ注文の本証九文わきてん母緒の駒下駄に浪花町みやうかや眺へ羽二重洋巾の足袋といふ所を此藝者の舊習を墨守するの歎乃至虫の性か古風にも素足を見せるが十八番横濱行きハ最負俳優が出勤の劇場へ見物の娯愉快歸りても有らうかと想像す傍に増添し男は此藝者の箱丁兼使役野郎とおぼしく年齢ハ三十四五デレリとした中に狡猾な容子も見えしやくれた顔色に愛敬を作り他に乗合のさいのを見懸舌たるい猫撫をよめて彼藝者が何か漠然と考へてをり升傍へマリくと詰寄まして(峯)大姐けふは道寄りせず直にお宅へお歸んなさい丁度三日目に(秀)峯どん三日目になるのは和主か言はさいでも知れてゐるヨそして新橋へ車が停けり家までは一足だ千何處へ寄路をする者歎新富町も留守じやアあい歎(峯)左様あら宜うござい升が大姐のうかれ筋じやアお父さんも困る名古屋のお客まで離れるだらうと苦勞してお出さるからサ(秀)峯どん何だねへ言ことがあるから家へ歸つて云てふくれ氣車の中でも途中だヨ(峯)イエサお家へ歸つちやおはあしが出来さい事があるのですから養蠅くともお聽あさい(秀)オヤ大層むつかしい話だ千として家ではあされさい

といふ事はマア何だ(二)いづれは話を致さふと思ひました。が胡麻でも摺つて好中を養つても思はれるのが愛うござい升から堪へて是までおくひにも出しません。が大娘貴嬢の新富町の一件に大あつてお出なさるが彼人の樂屋は私が久しく使はれて残らず知つてをります。が今牛若の源太郎といはれる程の男傾城で有升から大娘の腕まへが女辨慶でも太刀打をする。と向ふに土地の藝妓の味方が附いてをり升から減多に油断は出来ませんせ(秀)土地の藝妓の味方といふ……マア新富町の誰だへサア早く言つてお聞かせヨト此贈答の中瀛車の迅速「大森」

第十四回 見たき物劇場の樂屋とは清少納言が枕の草紙にも有さうあるものは附て團十郎の目玉の金光り菊五郎の天地窓は銀針がねを團次は俳優めがね真田目な男福助の人の源之助の藝妓受も舞臺は面部に紅粉を粧ひ身に錦織の衣裳を重ね奇麗立派は富前ながら散髪を着流しに和あしろいを洗ひわけ木地を磨いた素顔が見たいと開場前の樂屋口に白首の山を赤し輻輳の人力車と俳優の歸を待構へ狭い新道の塞がるにも頓着せず立定みて押あひの見物は悉皆婦人に限ります。頓て座頭中軸書出しと舞臺のひ揚々々の順序に随ひ名題俳優の地顔のアラを瓦斯燈の光に見られぬやうと帽子まぶかに抱へ車に乗移るが否哉カラトトと我家をさして逸散走マアレ成田屋か音羽屋がそれ成駒屋が父子連でと見送るひまに新

富橋を築地の方へさーらす轡きのふは東けふの西と思ひに家路に歸る跡は大風の吹たる如くてふたり散り三人三方四方八方劇場の内の繁實として音もさく表方の仕切場に定番の灯の光り茶屋の二階で藝妓の合奏團八がヨイヨイヤサヤサの息繼に頂戴の酒が廻つて疊み埃の騒ぎも鎖まり樂屋新道に人氣もさく埒清が撮影の看板も欄ばかり残り柴門堅く鎖したる午後十二時過關間の奥の隠れ家に舞臺等れか前後も知らず眠りに着し門の扉をトン／＼と激しく敲けば此家の男が不睡目覺し寝惚まことを察りながら夜着から半分乗出しまして「何殿でござい升モウふせりましたから浴用がござい升あら何卒明日と斷ると門口で「ヘイ誠にか氣の毒様でござい升が一寸こゝをおわけますつておんなきい峯吉でござい升といふはたしかに覺えの聲「オヤ峯ぞんかへ今時分何の御用で「エー太夫さんではない源太郎さんに急にお目懸りたい用向で深更にわざ／＼出まいたが一寸こゝを強ての頼みに先頃まで此家に久しく住はれた屋ひ男夜中であらふと何の仔細も無からふと溢々に夜着から起立ち庭口へ出て木戸のかけがねを内から外せば計らんや峰吉ひとり計りてあく跡を續いて入來し美人のいはでも知るき物腰格好夜目にも藝者と見おはぬの姿に男は少しく驚き「オヤ日吉町の大姐大層おそいか出て有升「ア一遅いの承知て來たヨ的の家かへ「へー奥にかやすみてござい升と云を聽乘て隔ての障子を押あけて

當家のあるし今牛若の源太郎が生体なく打臥居る座敷の内へつかくど歩み入枕元へ据り  
込み「モシ源チャン起てくれオイ」と呼ばれ寐耳に水の源太郎の悔りして起あがり  
薄くらき寝覺の燈火に眼を擦ちがら見あぐるに島田鑑の襟元に亂れ座敷着の上にお召編  
の半纏羽織をひつかげ何やら袖に隠し右の手に持ったやうす源太郎は薄氣味わる氣に身  
を返けて跡退り藝妓のシリリ〜詰寄つたり

第十五回 外面如菩薩内心如夜刃柔和にんにくに臭氣あまとも伽羅の薫りに覆ふ一時ど  
め木の薫り散矢せば本來の臭皮体美女の憤相を般若の假面に擬するも故わりホンニ男は  
悪性者と戀のねたばの光りするどきけんまく只事ならずと今牛若の一寸と小用を連れてから  
咄しはゆつくり聞ませうと薄氣味わる氣に寢處を立て庭口からドロンと成れば秀て腕の  
藝妓氣もつとめ離れた此場のこんたん小用を連れて戻ったあら此身を除て増花の出来た証據  
をあらへ立舌の刃をひらめかし存分恨みをいふて退むと一番機嫌の腹立上戸待てども〜  
黽の路ゆる猫撫てゑて此場を胡麻化し逃たそ〜白風何處へ姿を匿さうとも見込むだから  
は逃してあるかと立上りたる權幕を峯の松風箱丁はふしどめ「大姐的は裏口からドロンと  
成つて消ましたからモウ能加減になさい升彼人計り俳優でい有ません今夜は此儘お歸んあ  
さい」それでも胡麻吉さんから今夜聞いた一件で妾の顔を汚されたから汚れた顔をきよく

濡り洗はあけまやア新橋藝妓の顔にかゝはるヨ何んでも今夜は居すはつてゐて何處なりと  
も形を付て背はあければあらあいと押へた袖を振切つてわめき散せば箱蓋はあいやらやつ  
と和めて人知らぬ夜の丑満過藝妓を運て新富橋を南へ渡り橋詰に待たせた車に乗移りその  
夜の無事に納まりの付かぬ遺恨のうはあま打箱丁の峯が双方の胡麻を幸ひ源的もスラお  
そろしの劍相にモウ懲々とその後のふッ〜り縁の糸目を斷り藝妓も腕の秀といふ太閤猫の  
斷念に是からはあの源太郎より一層立あがつた名題者を餌食にしての面當と築地川の劇場  
賑をねらひ込むたの近邊の大阿姉の周旋とやら此方はかぶさるつもりでも先の俳優(否)相  
人は病身者程あく冥途の旅しはるへ出立したその頃に又新出来の客筋の紳士にあらす物持  
の大盡でいあい會社づとめ社長は大きな倉持ながら其處の社員の小給者とはさすが人間の  
本阿彌ならぬば最初から鑑定に付かぬと見え諸事行渡りの届いた客と怒から情に誘はれて  
隠れ遊びの親類付合宇治の茶色の八重山吹取持人に誘はれて浮かれからすの羽をひろげ身  
儘氣儘の自由遊びは猫足を洗ふに不如と或富豪に金主を頼み腕をふるふて大川端の大きな  
家をまんまど買受け待合茶屋の開業に諸新聞の記者達を請待の店開きは梅雨降そめし頃に  
ぞ有ける

第十六回 親が承知て藝妓をさして浮氣するおも能出来たと舊調の百々選は維新前のむか

しと成りも容貌の美しい女の子から年齢の十六武蔵資本をかけた商賈の細利に勝る搖錢樹  
 その糸道に引かけて下地ッ妓から鳴らさせる四ッ乳三筋の音色に染み風には靡く柳橋小今  
 と呼ばれし離妓の頃より自然とそあはる藝妓肌ホニニ恥駒大姐の能やうすの子を抱へたね  
 一聞けば士族のむすめと歎でお爺さんの瓦解以來品川の停車場で水菓子とかの小商法その  
 時分に小今さんを藝妓にさ一たら浮ぶ願もあるだらふとの親の慈悲抱へた大姐も此子あら  
 ど見込を付て養女に貰ひ一本立に仕揚てから小秀と成ッての流行ッ子木の實は元で離縁と  
 かも獨立してから實親に孝行半分持前の腕をふるつて稼ぐ又道樂のありうちと同業の藝  
 者も舌を巻き茶屋松宿の客受もよく賣盛る座敷敷重ある猪口の酒癖が玉のさかづき座敷上  
 戸玉に疵なる意の騎狂ひ出しては度もあく俳優藝人との自前遊びに花美を浮名を流し短  
 かし三業會社の同業割れにどちらへ属ても面倒と風の紊れの柳ばしを引込みの送り三煎  
 臺を替て新橋の日吉町より再勤の改名ひろめ歌川屋秀吉と軒提打も新らしく進む座敷の會  
 席料理その後口を待合茶屋遠出の約束温泉ゆきあぢみの外出申さずと門口へ斷をを出さ  
 ぬ計り此全盛の世やすめと口直しの自分うかれは澤邊に寄するむら千鳥を觀世水の波間に  
 あがめしは海老の生づくりと榮耀遊びも一時の歡樂これらは當座の花と見て色は勾へどち  
 りぬるものやきは藝者の常ながら俳優に見替長者を除て深く契りし其人は藝人でいあ

客筋(盤)と字の懸の山踏さすがのたいかう腕よし猫も「君ゆゑならば此命何かあしまん驚  
 驚の」と一中節の文句あらで人目を忍ぶ少將が道行の比翼車隠れたるより顔るはあしと  
 浮名を厭ふ太閤猫の才はぢけたる分別より廢業間もあく濱町河岸に屋氣接露の待合茶屋を  
 開業の大景氣花井あうめと本名に歸り咲の紫花陽七變化の妖顔華麗遠山の眉借氣あく制落  
 し眞赤し島田を丸鬚に結あはしたる細君製服開業披露の手拭ひ配りも赤坊主の谷齊と附合  
 せの野幫間が前立て以前の箱丁峯吉が後押へおなじみの客先得意の料理屋待合勿論新柳妓  
 町その外よし原しは町とさかま堀廻りに開業も首尾よく濟み一日間もなく夏季にむかふ  
 逆上加減か新宅は父親と雇ひ人に打委せ不圖出た切で二三日戻らぬむすめが氣まぐれ遊び  
 必定誰かど一所て有らふオイ峰公あうめが出た切かへらぬが大方日吉町の師匠の所へし  
 け込てゐるかも知れぬ太儀でも一寸行ッて運て歸ッて来てくんあ彼氣まぐれにも困ッたも  
 のだ不幸を奴と親父の立腹「實に大姐のやうに我儘の前後見ずでも困り升私がちよつら  
 見て來ませうと戶外の方へ走ッて出て軒に客待つ人力車の價もきめずトッハクサ新橋として  
 カラ〜〜

第十七回 行水の流れの絶ぬ大川筋新大橋と兩國の中を上流に登り船波切車演笛のあどづ  
 れ乗合漁船一銭の便利に進む船の脚傳馬家根ぶね猪牙筏續く川邊の西側に新築あらねど何

某の住家とぞ見る大厦高樓その跡式を譲り受け誰待合の掲札は酔月の名に知られたる開業間もさき來客の出入はけしき各席の賑はひ仕切座敷に連込みの猫撫聲の狐鼠くはあし隔ての襖障子越廊下を運ぶ詠への大橋樓の仕出し料理茶の香を酒の香に換て藝者が座興の合奏に唄ふ小唄の「風にうらみ」もチト流行に後たど無上に粹がる花柳あらし未た宵の間の醉加減「カウ」家婢けふは秀吉さんじやあかつた當家の細君は外出か子(婢)へー(●)イヤサお留守のかエ(婢)ハイよんどころあく今日早朝からチト遠方へ出かけました(●)ハ、ア開業の配り残りに出かけたのでも有めへが又根岸か池上の温泉行か乃至新ばーの故郷忘じ難しといふ隠れ遊びか子(婢)オヤ客費は能く微細い虎を御探索でスねーチホ、ハ、ハ、ハ、(藝)お珍さん此お客様の新聞の探訪を御内職にあさるから油斷は出来ませんいつも妾連の事を出して下さるので有がた迷惑の土地あらしてス(▲)馬鹿なことをのたまふせ和女達の事を新聞へ投書すりやアその紙で富士の山の張抜が出来る(藝)止ても頂戴まや流吉さんあんぞはあんまり無事過るから買れあいでス(流)ア、ハ、ハ、ハ、様ですヨ齋吉さん如何ですか妾等ぞと来ては誰殿でも相人が出来て新聞へても出されたならたどへ榮譽を害されても偶には如何あ藝者かと思つて聘で下さるお客様も有ませうからあはじみ甲斐に無根の事でも何とか作つて投書でもして頂戴ナ(●)ハ、ハ、ハ、杯といつて投書をさして損要償でもせしめ

る氣だらふ(流)オヤ妾連に三百屋の代助さんでも關係が有ませんから名譽回復あんぞど出かける氣遣ひは有ません(▲)何でも早く紳士か豪商のお客に頼むて大待合でも開業するが能せ齋吉さんも同議だらう當家のうめさんが能摸範だ(齋)左様なつたら此上若ンぶんお引立を願ひ升その積りて一盞ちやうだい○此時家婢が「ストック」の燭瓶を二本提て座敷に立出(婢)唯今ワロコノ宜いのがキレましたが「ストック」では如何です(●)何でも能から口を開ナそしてお梅さんのお歸りの未かノ(婢)ハイ唯今歸つて参りましたから御挨拶に参り升といふにふたりの胸婆連藝者少し座を下つて衣紋を繕ひ客も座振をあほしました第十八回 青葉に茂る夏木立大森村の停車場を下りて纒か一里足らず人力車なら三十分蛙鳴なる池上の鹽山を背後の開墾地去年は野山と畑の間あひだの茅葺屋根を木の間隠れに見るばかり日蓮大士の古跡を止めし本門寺のお命講信者が通夜のその外は常に往來も稀なる僻邑高丘に登りて東南の海上はるかに見渡せば颯車の通ひの筒畑り機笛の音に夢を破り左せる風情もあら磯の荒井が崎を直下に眺め並ぶ臺場と汽船の帆柱沖にたゆたふ漁り舟唯是程の景色にて川崎の弘法大師に徒歩まうての歸るさには餓い時のまづい物あしと山本の矢大臣茶漬の菜の定食の煮豆乾海苔梅びしほを東京での會席料理と替を採しもあひくよ山を切田地を埋め開け初たる家屋の新築本門寺との脊中合せ遠く房總の山々を仰ぎ近く内

海の浪に接し山上新に屋氣樓を現出するかと怪むはかす想に輝く光明館用木造りの屋上層  
 下この新築に建添て西洋食に日本料理浴室あれば旅宿あり雪のあした月の夕邊花散る後の  
 夏季にけらし白地の浴衣温泉入避暑の設けの風入座敷空気の流通宛も好しと氣車人力車の  
 便宜に乗じ華族官人紳士豪商日曜大祭の休暇には勉勵の骨やすめ命の洗濯金(トッコイ)金  
 持の皺のばし奥さん權妻ボツちやん連の無事なるわれは薪柳の愛猫地野狸の惡取巻ばア  
 猫の周旋ぶりに泊り込の娛愉快筋燭を乗て夜る遊ぶ桃李艶麗の杯酌に長の日を繋ぎ棒の一  
 中節テツンテンの遊がりあれば黄色い聲の清元歌澤木魂にひく大音聲に唄ふも舞ふも  
 乗地の騒ぎ暮れば明る短夜の曙の別座敷借切る一室には男女の客男は何處かの商會と歎  
 手代とかいふ位のきどり家にて散髪勿論着流しの藍微塵お召の袴を袴浴衣の上に重ね金剛  
 時計は襟元に銷りを光らし細帯のくるくろ巻是に對する婦人といふハ一ト目見ても藝者脱  
 り去とてばア猫ではあく一寸見てもは二十一二その實は二十三四の細面現此頃まで新機  
 流行ツ子の活潑で切て廻した若大姐チト浮々とうかれる癖ゆゑ米櫃の目的が氣がもめの吉  
 祥寺茶の會ではない酒宴の座敷へ引手數多と呼ばれる中には好男紳士のおあじみが出来や  
 うも相知れず輩その事に猫足を洗ひあげての圍ひ妾半元服の當世丸鬘眞面目に成つても持  
 前の浮氣は止まぬ隠れ遊び情夫と客の合の子と二人連の長逗留花にうかれ月に酔ふたさし

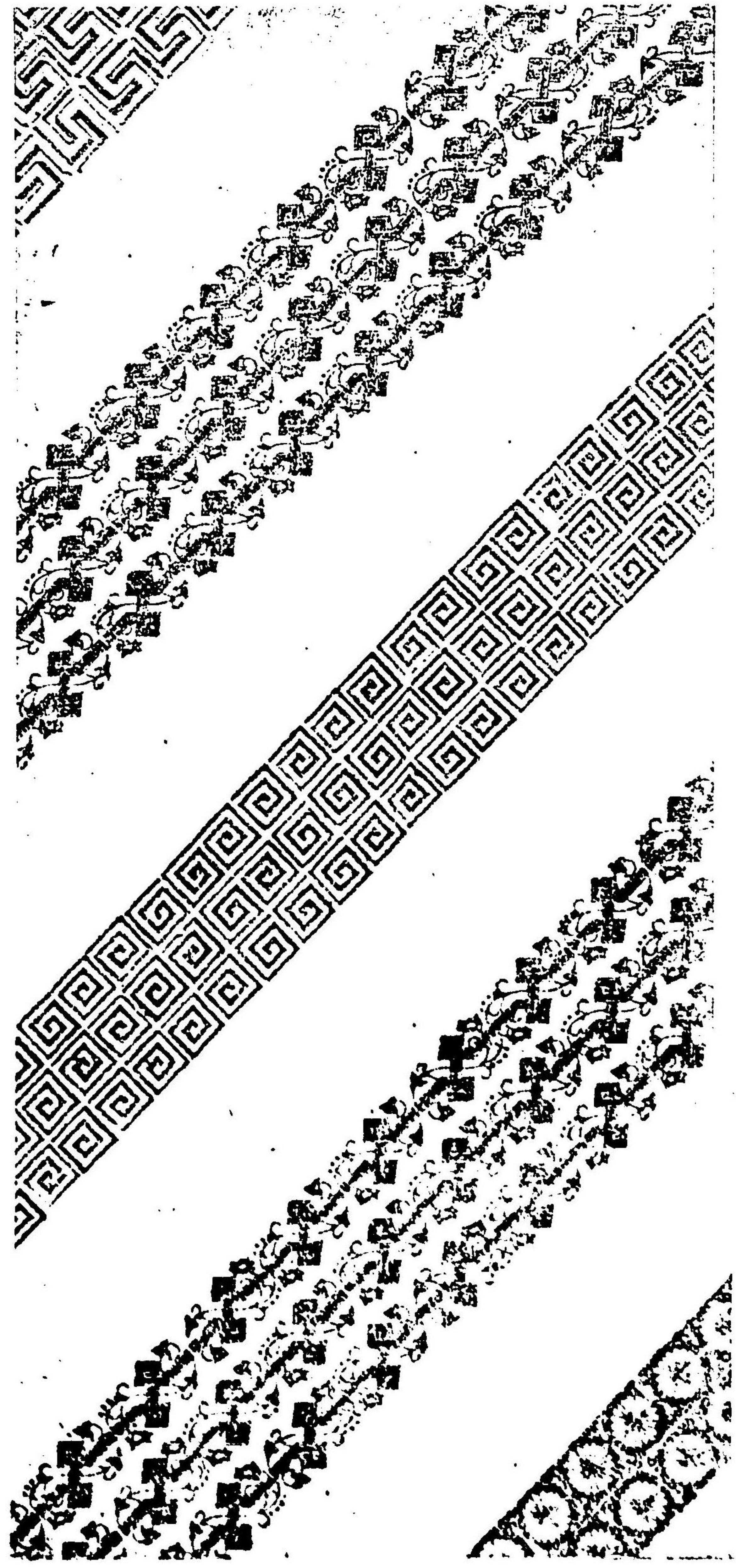
向ひの次の間から四十を越た宇治の茶の香の遊がつた大年増が障子をあげて湯あがりの浴  
 衣の湯で「ア、能お湯で有ました  
 第十九回 和洋の食を山海の佳景に込めし池上の光明館の軒續きわけはの櫻の浴室にゆあ  
 みの客の出入も繁く仕入座敷の間毎を隔て千差万別ひとさま々思ひくしのしりう音塵の  
 噂も混濁の肌むつかしき世事百談「トキニ猪尾助若此山上の櫻臺から海上の見晴しは實に  
 絶景でケス湯あがりの浴衣かけて一猪口の酌酌を同行の別嬪に托す杯といふ贅澤の所我  
 輩の權力にのちい事だか男子同士の對酌では充分酔氣を致しやせぬ「左様く酒あくば何  
 のおのれが櫻哉と古人も吐たが嫺婦なくばなんのおのれが美祿哉「男やもめに花が咲日  
 和はねへから光明樓の洋食で滋養腹をこしれへたら此處を切揚て今夜は品川で一泊は如何  
 附合たまへ久一振「是はけしかることを聞ものか赤瀬車の便利の有ながら此池上まで出  
 張いたのはお互ひに養生に關した保養筋だから蹄踏の登壇は健康を害すたらふ「イヤ左  
 様正則に論じちやア突屈に成つて保養にあらねへ權妻や愛女を連て温泉場に長逗留する  
 人さへ有から洋食の滋養物で腹をこしらへ温泉で身を温ためたら一夜位のは煩悩の熱を冷  
 すも其つて支体の藥に成らふ「ハ、ア手無勝手自由の早職で論題の演説は如何でも言廻し  
 の出来る者併し男子ばかりの飲合は興がねへ奥座敷の半元服と客たか情夫のやさは君何

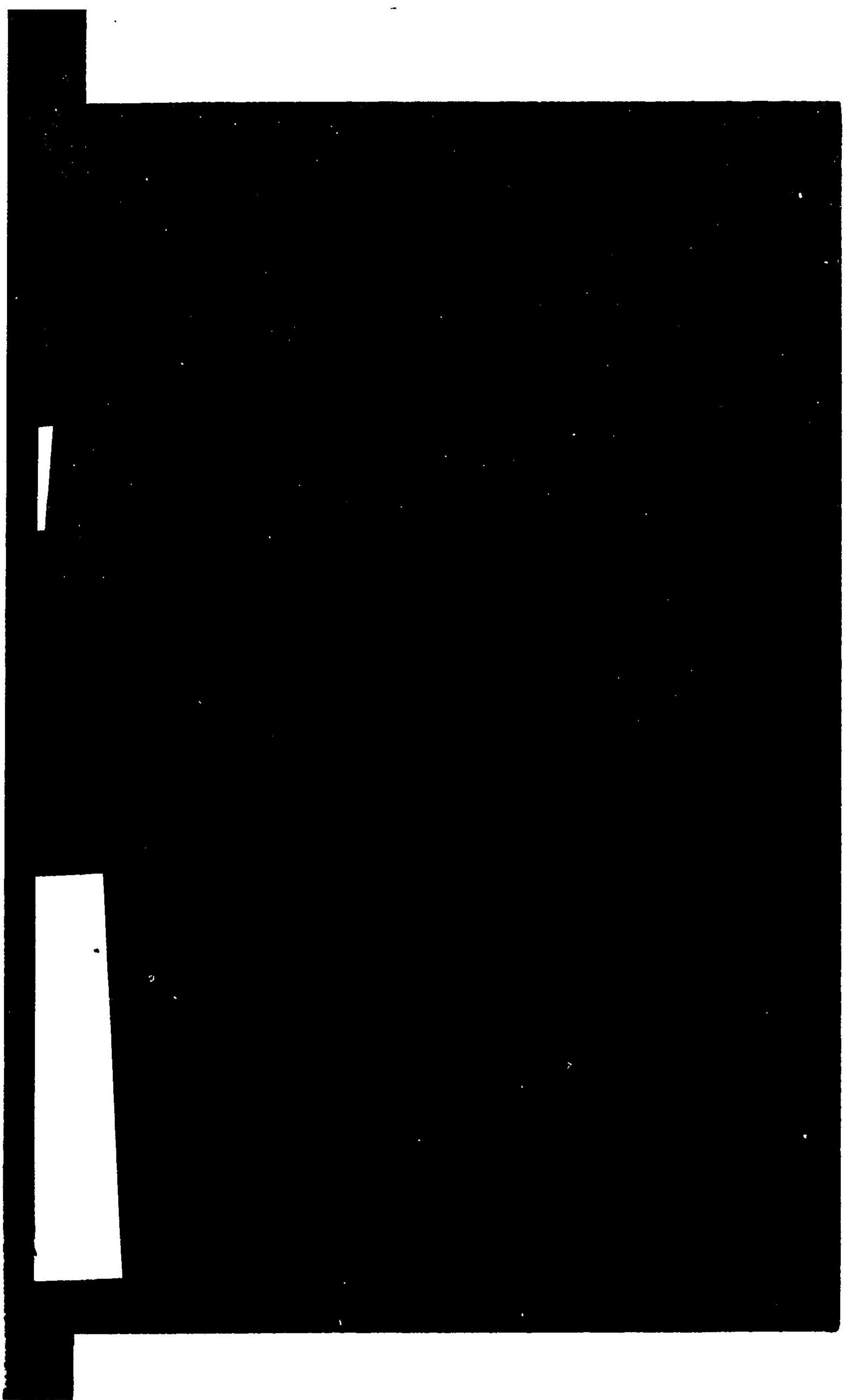
者と鑑定つけたか婦人の頗る別品たがなんでも唯の鼠じやねへせ「勿論猫脱てサ「オヤ君は  
 は大分知ツたふりだが何者だエ「今無呂場からわがッて来ると廊下で出わつた大年増と顔  
 を見わふど豈計らん哉渠は日吉町にテツ、ンテンと藝者連の指南所かねて知己の宇治八  
 重といふめんちりだから誰と一所だと尋問したら同行の客筋の或社の社員何某てその同伴  
 の陪品の柳橋では小秀と呼び新橋へ巢を替てから歌川屋の秀吉といつた豊富大功うでよし  
 猫そのヤレソレも此頃切揚濱町河岸へ酔月と家名しての一本立當時の花井おうめといふ  
 はれの女あるとと幾ら老種をあげて来た「オヤ君の新聞社の探訪でも内職にするのか大分  
 微細く聞込むだノ而て同行の何某が且那筋か「イヤ然らず左に非ず彼の好男子は客脱りの  
 情夫筋を秀吉のお梅大姐が米櫃と營業の金方の他にありサその大客の眼を忍むて上等氣車  
 の合乗で温泉のいれ浸りとは男子もよつほど好株だヨ「浦山く左いふ同宿のゐる處には  
 長湯は出来ぬ一日没前に切揚て品川く「想に本營は島崎か相摸屋か僕は岩槻太田樓には  
 些少關係なきにしもあらず「その協議は「テーシヨッア」の妓事堂で決するから先出發の準  
 備く「肌に馴ねへ洋服を着て来たので浴衣と着替るとも荷を存貨やうにゐる「ボンく  
 く「イヤ拍掌位ぬじやア滅多に家婢が出て来ぬへ日曜ゆるか強勢客があると見える「ボン  
 くく」と無上に掌中を打鳴らす入浴の客の歸り支度此方の廊下に迂路く」と年齢三十五

六の男藝者の供から箱まはし敷々齒て凹れた頼問を顔色ちよこ〜とこらを立てり「モシ  
 女中さん酔月のおかみさんのお座敷の何處でスアノサ新橋の秀吉さんの事ですヨ  
 第二十回 新橋以北の西巷路二等煉瓦の家作り軒端に續く丸提打は白晝と夜陰とに掛替て  
 向屋の誰と目標の光をあらそふ日吉町金春といふ舊き名に縁む稱への板新道みち巾袂き往  
 來も開けて廣き藝者の住家見し玉だれの格子の内暮きくもゆかしき三筋の音色此方て彈け  
 ば彼方にも彈く三味線の猫の皮むかふ三軒雨隣家と耳かしましき朝稽古未だ大姉のお休み  
 ですと抱への離子が雜貨商と糶呉服の負債を謝絶するも常ながらお茶挽われば賢ツ子わり  
 藝は東園き容貌と動靜てはやる座敷敷朝寐は昨夜の長座敷短かき翌の夜もすがらわかしも  
 須磨の後口に間に合かれし全盛の夜を日につぎの朝寐房も稍く正午の號砲に驚かされて遊  
 い眼を寐間着の細にこすりながら枕邊の煙草盆を長煙管の雁首で引寄せ壺井の煙り一二ふ  
 く吸亮はたく灰吹きを音をさるべにトン〜と階子を登るは同業の終者づか〜二階に登  
 て来て(▲)大姉マア大層朝寐じやア有ませんか妾なんぞは今朝起ると直に越前堀のお岩  
 様へお参りをして其歸路に木挽町の妙法様へ熱め手拭巾を献て来てゆふへ喜多川の帳場へ  
 預け物をして来たから一寸寄ッて取ッて歸つたのに未だねんねといふ大分お勞れ筋です干ー  
 ○此時大姉寐床を遣出(●)なにサこん赤に寐はうをするのじやアあいが昨日は瀬野屋の



かかみさんに誘引こびらて新富座を見物してゐると閉場前ひりまへに蛸壳町たこがしの御連中が是から濱町の酔月よづきへ行から一途いつしよに來いと仰おつしやつたので死なじみの御連中おんれんちゆうだゞ否いなともいはれをひから秀吉ひでよしさんの義理ぎりかたゞ行氣ぎきに成つて濱廻屋はままわいのおかみさんに譯わけを言つてその御連中おんれんちゆうと酔月よづきへ行つて一時過すまに歸つて來たから寝たのの二時頃ふたときカ(▲)オヤそら夫おつとじやア眠ねい突つてすがそんなら酔月よづきへ行つて秀吉ひでよしさんじやアあい彼花井かゐお梅おむねさんに逢つたのですか(●)イ、エ妾めかけも開業かいぎやうの時贈牌おくりはいと義理ぎりは持たして遣つたがあつらへばつうて此土地このちを別れた切秀きりひでよしちやんに逢あひか逢あつてもとて行つた處ところろが内に居ゐるので豈いかぞんにないく聞きくと彼人あのひとの十八番じゅうはちばんて開業かいぎやう間まもあく又氣またきさくれを起おこしてお父おちちさんと物ものいひをしたはづみに宅たくを飛出とどして池上いけがみの酒泉さけいんとかへ長逗留ながどらうて十日じふにちばかり歸かへらさいといふ事ことカ(▲)マア折角せつかく立派たひらに開業かいぎやうして堅固かたか飾かざりを出だしたと思おもつたらモウそんな譯わけですか然しかし定さだめて一件いっけんと一所いっしょてせう、(●)どうでひとりじやアあからうが彼人あのひとも能腕いづらの働はたらき者ものて今度こんど出した酔月よづきの家いへあんど華族けわしゆ様の御別荘おんべつしやうとていひさうあ立派たひらな家で待合まちあなんぞには御前上おんまへじやう等過すまる位くらいで大層たいしやうお金かねが懸かつたらうに堅固かたか此處このところで勉強べんきやうしたら能よさう考かんがてすが働はたらき者ものだけ道樂みちがくが過すまて時々ときどき氣きさくれを起おこずのが玉たまに疵きずてす(▲)夫おつとといふのも彼籠あのかごといふ意氣いぎを情夫じやうふが有あからサ(●)お客おきゃくに懸かつてハ五分ごぶんもすかあい脚前あしづみても俳はい優うたの藝人げいじんは此方このあたの玩弄あそびにする氣きになるからしまいに手轉てころんで馬鹿ばか氣きた目めにわふのがう





特10

776

花井於梅粹月奇聞

上

国立国会図書館

091257-001-7

特10-776

花井於梅粹月奇聞

秋葉亭 霜楓／編

上

M20

DBN-2111

